

## 【R6.7.1】「八王子市命の大切さを共に考える日」校長講話

- 八王子市立小・中・義務教育学校では、毎年度この時期に「八王子市命の大切さを共に考える日」を設定し、校長先生からの講話、命の大切さを共に考える道徳科の授業などを通して学ぶことになっています。この取組は平成31年度から始まりましたので、今年度で6年目になりました。今日の話はどうでしょうか、とても悩みました。けれども、直球でいってみようと思います。
- この取組の背景には、平成30年8月、市立中学校において、いじめにより、かけがえのない一人の子どもの命が失われたということがあります。この出来事を私たちが「忘れずに受け継ぎ、学び、そして活かす」という意味があります。そのため、この出来事について振り返ります。
- この子は、家族旅行のために部活動を休んだことから、他の生徒に非難されました。そのことをきっかけにして不登校になり、そして転校することとなりました。しかし、転校して5ヵ月後、自らの命を絶ちました。
- 今日、私が四中のみんなと命の大切さを共に考えるために、伝えたいことは次の2点です。
- 第1は、失った命に関わった全ての人の「悲しみ」です。八王子市の教師の一人である私にとって、「もっと何かしてやれることがなかったか、あったはずだ」という後悔と痛恨の極み、そして「悲しみ」を今でも抱えています。私は、教育委員会の事務局の一員として、この出来事から学び、再発防止に向けて今後どのような取組が必要かを検討し、実行する役割を担当していました。一例を挙げると、令和4年度以降、全国でおそらく八王子市立学校だけが、週の授業時数が標準的な29コマでなく、1コマ少ない28コマに変更となっています。当時、たくさんの方々から「学力が低下したらどう責任を取るつもりなのか？」など、厳しく批判されました。1コマ減らしてでも、先生たちの「いじめ対応の時間（記録・共有・対応検討）」を安定して確保する必要があったのです。私も「悲しみ」をエネルギーにして、粘り強く取り組みました。現在は当たり前のこととして、かなり定着していると言えます。「悲しみ」ということでは、到底比べることはできませんが、亡くなった生徒の保護者である遺族とお会いする機会もありました。昨年度、教育委員会の事務局を代表して遺族とお会いし、この間の教育委員会と市立学校の取組について報告と説明をしました。遺族は6年を経過した今でも、なんら変わらない深い「悲しみ」を抱えていることが伝わってきました。失われた命に関わった全ての人の「悲しみ」が消えることはないのだろうと思います。なお、この「命の大切さを共に考える日」の取組も、遺族の「第2、第3の我が子のような子を出さないように」という「悲しみの連鎖を止めてほしい」という願いから始まっています。
- 第2は、「いじめを許さない」ということです。別の言い方をすると、人間として「他人をいじめるなんてかっこ悪いよね」という雰囲気をつくりましょうということです。みんなでよりよく生活するために、どのように工夫するか？基本的には、人間は生き抜くための知恵の一つとして、他者と助け合うものです。とは言っても、自分の言動や行為に対して相手がどのように受け止め、感じているかは正確には分かりません。たくさんの方が、いろいろな関わりをもちながら生活していたら、「いやな思いをすることがある」ものです。だから、そんな時「誰かに相談したり、助けを求めたりすることは、少しも恥ずかしいことではない」ということを、みんなに改めて伝えたいです。
- 失った命に対する「悲しみ」が、いつまでもこうして消えないのは、「失われた命が他にかえられない、唯一無二、絶対的に大切な存在」だからです。そしてそれは、あなたの命も同じです。